

右手にプロレス、左手に少女マンガ！

# 「かわい〜」「泣かせる」「怖〜」がぶどう

マンガは好きだけど少女マンガは縁がない、  
という男性は少なくないようです。

しかしそれは人生の大損、もったいないですよ。

長く深く少女マンガを愛読されている夢枕獯さんに聞きました。

## 作家 夢枕 獯

●ゆめまくら・ばく 1951年、神奈川県生まれ。東海大学文学部日本文学科卒業。『キマイラ』『サイコタイパー』『闇狩り師』『餓狼伝』『大帝の剣』『陰陽師』などの人気シリーズを発表。日本SF大賞（『上弦の月を喰べる獅子』）、柴田錬三郎賞（『神々の山嶺』）、泉鏡花文学賞（『大江戸釣客伝』）などを受賞。

## 少女マンガを買い込む

僕が少女マンガの存在を知ったのは二〇代前半ぐらいだったと思います。そのころSFの同人誌がいくつかあって、仲間が集まる会の一つが渋谷の道玄坂に近い喫茶店で開かれていたんですよ。

僕もそこに顔を出していて、集ま

ってる連中が、いつからか「萩尾望都は面白い」と言い出すようになって。萩尾望都の作品が載っている雑誌を持ち歩いたり、切り抜きを持っていたりすることが、ちょっとおしやれに見えたんです。もともと、当時もう一つおしゃれだったのがプロレスです。「僕はプロレスと少女マンガを愛しますよ」とアピールすると、「お、やるねキミ」という目

で見てもらえたわけですよ（笑）。プロレスはもとも好きだったのですが、少女マンガのほうは見落としていて、仲間が「面白い」と絶賛する萩尾さんのマンガを読んだところ、本当に面白かった。最初に読んだのは『11人いる！』ですが、あまりの衝撃に、読んだその日にすぐさま本屋に走って、目に入った少女マンガ誌をすべて買い込みました。

三〇冊ぐらいはあったかな。

そこから数年間、のめり込むように少女マンガを読みました。好きな作家というものもできた。好きが高じて、少女マンガのアンソロジー集を作ったこともあります（『夢枕獯少女マンガ館』文藝春秋社）。

当時好きだったのは、陸奥A子さん、岩館真理子さん、太刀掛秀子さん、田淵由美子さん、赤座ひではるさんなどのかわいらしい恋の話、いわゆる乙女チック系作品です。朝に一作読むと一日幸せでいられるような作品ですね。『菜の花畑のこちらがわ』をはじめ、僕が勝手に『菜の花畑シリーズ』と呼んでいる樹村みのりさんの短編集、『夢みる頃をすぎても』などの吉田秋生さんの短編も好きでした。

いまは、そのころ読んで面白かった人たちの中で、現役で活躍されて

いる方の作品を主に読んでいます。中心になってるのは、やっぱり萩尾さんですね。

## 少年マンガにない感性

少年マンガや青年マンガはもちろん好きで読んでいたのですが、当時はスポ根や『あしたのジョー』（ちばてつや）、『空手バカ一代』（つのだじろう）といった、どちらが強いかを闘って決める対決モノ、それからギャグマンガなどが多かった。少年マンガにもすごい描き手たちがいた時代でしたが、少女マンガはそこにない路線だったんです。

ストーリーとして多いのが、好きな男の子が自分のほうを振り向いてくれないパターン。あるいは不良っぽくて大嫌いと思っていた男の子が、雨に濡れた小犬を拾う姿を見てしま

って好きになるといったパターン。他にもいろいろパターンはありますが、こうしたストーリー性は少年マンガが捨ててきたものの、基本的には使わないものですから、それが新鮮だった。

また萩尾さんのような優れた描き手が、少女マンガの世界にも何人もいらつしやう。マンガ家として才能にあふれた方たちに出会ったことも、少女マンガにハマった理由だと思います。

少女マンガとプロレスは作品を書くにあたって刺激になりました。少女マンガには僕らにない感性の、泣かせる話が多いんですね。少年・青年マンガには、考えさせられたり、すごいと思わされたりする話はあるけど、泣かせる話はありません。僕にとつての少女マンガは泣かせる話で、そこから受けたインパクトは僕